

喀喇崑崙  
嶺に雪消  
えセシル  
カルドン  
嶺に氷河  
あるは如  
何

々嶺南の急坂を下り、午後五時レ<sub>ー</sub>即ちラダックに入る。而して荷物は夜正に十時三十分に及び、始めて予が手に渡りたり。以て犂牛の如何に遅歩たるかを知るに足らん。記し來れば單に斯の如きに過ぎざるも、其の氷河超過の危険なる、若し一步を過らんか、滑走直に千尋の壑中に陥りて忽ち粉壑すべく、鞋下櫟を施し、杖先づ固く定め、既にして、歩を移すの狀、焉んぞ犂牛の遅々たるを笑ふを得ん。僅に二町に足らぬ氷河を渉るに、強力の扶けを借りて、約二時間を費せり。惟ふに此の如き天險は畢竟渡らざるを得ざると、勢とに因つて始めて通過すべきものなり。予豈敢て暴虎馮河の勇を試る者ならんや。

讀者或は是に至り、端なく疑問を喚起するならん。何ぞや曰く、最高嶺喀喇崑崙頂上に雪消えて氷河なく、而してセシル嶺カルドン嶺上に至りて氷河あること即ち是なり。予も亦初め此の疑團を起せしが、惟ふに印度大平原の熱風はヒマラヤ山脈に遮られ、天山南路大戈壁の熱風は喀喇崑崙嶺脈に阻まるゝが故に、其の感應は、中間の高嶺に及ばす能はず、爲めにセシル、カルドン二嶺は、却て喀喇崑崙嶺より低きも、斯くは嶺上氷河を湛ゆる所以ならん。